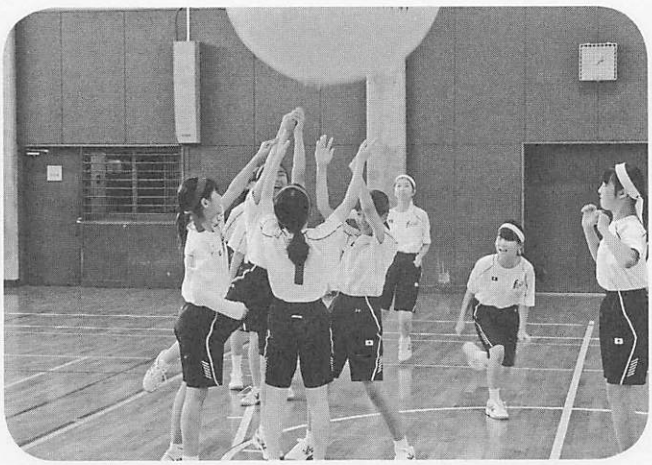
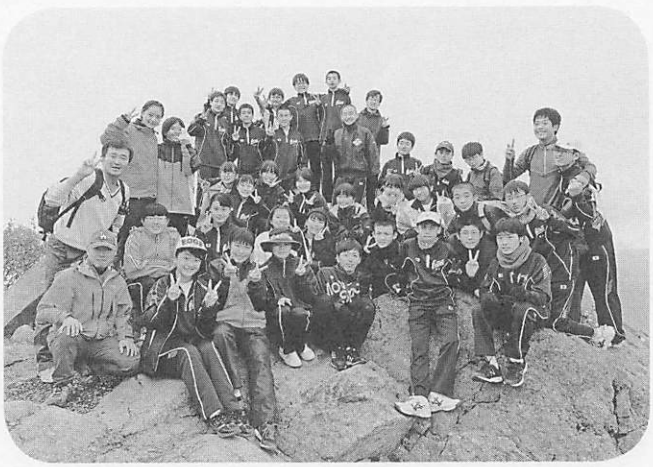
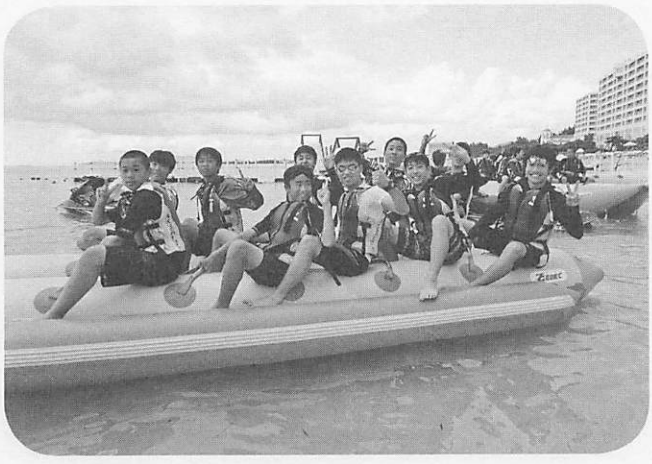
第Ⅱ部
教科領域別研究

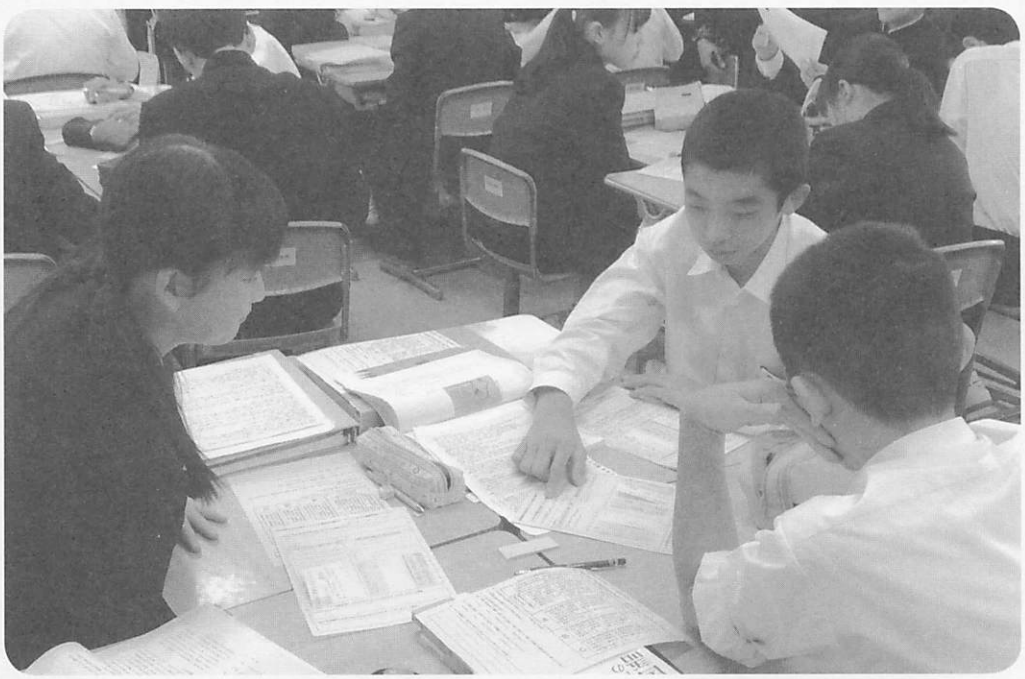






国語科

教科領域研究テーマ
【文学作品における読みの課題を
協同的に読み深める学習活動の展開】



国語科

文学作品における読みの課題を協同的に読み深める学習活動の展開

実　践　者　細川　美保，大上　航太，丸山　佑樹
愛媛大学研究パートナー　三浦　和尚

第１章　はじめに

生徒に持続可能な社会を支える資質・能力を育成するためには，自分の経験・価値観・感性などを基に言葉を用いて課題を解決する力（自立の力）と，多様な価値観を認め，お互いの個性を尊重したり他者と協調しながら進んで行動したりする力（共生の力）を育てる必要がある。

文学作品を読むことは，自分，それを取り巻く人，ものとのよりよい関係を築くための基盤になるとともに，読みを深める中で言葉を吟味し，読み手自身の経験や価値観と比べ，読み手それぞれの多様な考えを表出していくことにつながる。さらに，ものごとを批判的に考えたり多面的に捉えたりする力を育てるためにも必要不可欠なものである。

昨年度は，協同の学び合いを充実させるために，単元を通して持続できる課題意識を持たせるパフォーマンス課題の設定や，主張・事実・理由づけを意識して考えたり記述したりするとともに自分の考えの変化や他者との関わりについて振り返ることができるワークシート等の工夫，ホワイトボード，付箋紙等の活用を行った。その結果，課題に主体的に取り組み，主張・事実・理由づけを明確にしながら考え，表現するとともに，生徒同士の多様な意見を積極的に交わし合い，お互いの良さを認め合いながら課題を解決する生徒の姿につながった。これらの取組が上に挙げた自立と共生の力をさらに育てることにつながると考え，今年度も継続して実践を行った。

第２章　研究の実際

研究（その１）

対話的な学びを通して文章に表れたものの見方や考え方について読み深める学習指導の工夫

（実践者）細川　美保

１　研究テーマ設定の理由

現在，様々な場でコミュニケーション能力の育成が求められている。持続可能な社会を支える資質・能力として，他者に自分の考えを伝える力，多くの情報から必要な情報を取り出し，筋道を立てて考え，表現する力は必須である。

そこで，言葉そのものを理解すること，言葉のイメージから文章全体はどのような内容を述べているかを理解すること，それらに対して自らがどのような考えを持っているかを筋道を立てて表現することが必要であると考えた。また，同じ事実を基にしていても，その人の考えや体験，価値観によって，理由づけの内容に違いが表れる。その違いを知ることが，人を知ることにもつながり，共生につながる。

１年次は，自分が読み深めたことを説明し，仲間の考えを知り，お互いの考えを共有することで今までの自分の経験を破る新しい経験をするという学習を中心にしてきた。２年次は多くの言葉の中から，視写や音読を通して「読み深めるポイントとなる言葉」を生徒自身が考え，そこから学習課題を設定した。課題解決に向けて話し合い，聴き合い，共有し合いながら自己内対話の

時間を設け，文学作品に表れるものの見方や考え方について読み深めた。それを踏まえ，３年次は，文章に表れているものの見方・考え方について，共感したり，自分との考え方の違いを確認したりしながら批判的に読み深めていく。言葉の多様な意味に基づいて，思考し，自分の思いを表現し，他者の意見を理解することが，自己理解・他者理解や自他の尊重といった人間性の成長につながる。それらを目指し，本研究テーマを設定した。

２　研究の内容及び方法

(1)　協同の学び合いの場の充実

様々な意見を出し合うことで，自分の考えが広がったり，同じ考えを聞いて自分の根拠が一層明確になり自信が持てるようになったりするなど，生徒の考えの変化が期待できるような授業展開とする。また，うまく言葉にならない生徒に対しては，グループや学級全体でその生徒の思いを受け止めながら一緒に言葉を創っていくことを大事にする。

(2)　音読と視写を取り入れた授業の工夫

繰り返し音読することは，文章や言葉のリズムを体感し特徴を理解すると共に，日本の言葉そのものの響きの美しさを感じ取る時間となる。また視写をすることは，個人で言葉や文章，作品に込められた思いなどと向き合う時間となる。音読や視写は，音と文字によって日本語に触れ，見過ごしていた言葉を改めて見つめたり，その言葉の意味を考えたりするきっかけとなり，文章を理解する手立ての一つとなるのではないかと考える。その中で，生徒に主体的に課題を発見させたいと考えている。

(3)　学習者個々による学習課題の設定

文章や詩等を読み深めるために，どの言葉，どの文章に注目すればよいかを学習者個々で考え，その課題について自分自身がまずは答えを導き出す。その後，学級全体で，その課題について考えていく。自身の意見と照らし合わせながら仲間の意見を聞くことで，自分の意見に自信を持ったり，多面的に課題を見つめ直したりすることができ，考えをより深めることができる。また，仲間と共に課題解決することの楽しさや有効性を改めて感じさせたいと考えている。

３　研究の実際

(1)　単元名　　兼好法師のものの見方や感じ方を捉えよう

(2)　「逆向き設計テンプレート」による単元計画

第１段階：求められる結果
【研究テーマを踏まえた単元目標】 古人の思いについて仲間と話し合い，考えを共有しながら，作品に表れている古人の思いを読み深めることができる。
【本質的な問い】 古典作品を読み深めるにはどのようにすれば良いのか。
【永続的な理解】 自分の経験を踏まえながら表現に基づいて筆者の思いについて考えることが，古人の思いや古典作品のテーマに迫ることにつながり，古典を主体的に読み深め，味わうことになる。
【生徒は次のことができるようになる】（知識や技能） ○作品に表れる作者の思いを，言葉を手掛かりにして読み深めることができる。 ○自分たちが設定した課題に対して，仲間と共に意見を出し合いながら，自分の読みを深めたり，一つの課題を多面的に考えたりすることができる。 ○言葉という事実を手掛かりに，論理的に自分の意見を言うことができる。
【単元目標に必要な「論理的に思考し表現する力」】 『徒然草』の序段と他の章段を併せ読み，その中の言葉という事実をもとに，自分の経験や価値観に基づいて兼好法師の思いを考えることができる。

第２段階：評価のための証拠	
【パフォーマンス課題】 『徒然草』を書いた兼好法師の思いについて，仲間の考えをさらに深められるように『徒然草』の批評文を書きます。いくつかの章段の中から，序段に表れている兼好法師の思いが感じられる部分について取り上げながら，根拠を明確にして作品についての批評文を書きなさい。	
【パフォーマンス課題における評価規準】 ○『徒然草』を書いた兼好法師の思いについて，序段の言葉を根拠にして，自分の考えを書いている。 ○序段を読んで考えた兼好法師の思いと，他の章段との関連を，根拠を明確にして書いている。 ○兼好法師の思いや考え，書いたものに対して，根拠を明確にして評価している。	**【他の根拠】（評価方法等）** ○ワークシートによる記述 ○話合いの様子 ○自己評価 ○仲間の評価

第３段階：学習計画（全６時間）		
1	兼好法師の思いを捉えよう	１時間
2	兼好法師の思いを踏まえて『徒然草』を読み深めよう	２時間
3	批評文を書こう	２時間
4	批評文を読み合い，評価しよう	１時間

(3) 指導の実際（１／６時間）

①主　題　序段における兼好法師の思いを考えよう

②ねらい

○仲間との対話を通して兼好法師の思いを読み深めることができる。

○話合いを通して自分の考えをまとめることができる。

③展　開

既習の古文の言葉について振り返り，歴史的仮名遣いを確認しながら冒頭の音読を行った後，以下の流れで授業を行った。

学習活動（形態）	○教師の働きかけ	○指導の工夫　◇評価（方法）
3　学習課題を学習者が設定する。（一斉） 4　学習課題の解決に取り組む。（一斉）	○文章の中から，「読み深めるポイントとなる言葉」はどれか考えてみよう。 「あやしうこそものぐるほしけれ」とはどのような心境なのだろうか。	○自分なりに文章を読み深めるための言葉を見つけるために，しっかりと文章の言葉を見つめた。 ○「ものぐるほし」は古語辞典に様々な解釈が載っていることを知らせるために，教師が辞典を引いて意味を確認した。
(1)　意味を確認する。（一斉）	○「ものぐるほしけれ」の意味を古語辞典で確認しよう。	○序段の表現や自分の経験と関連付けて考えることを生徒に伝えた。
(2)　序段の兼好の心境を考える。（個人） （グループ） （個人）	○筆者がいう「あやしうこそものぐるほしけれ」とはどのような心境なのか，自分の考えをワークシートに書こう。 ○課題についてグループで話し合おう。 ○自分の考えを見直そう。	○思考を整理させるために，考えとその根拠をワークシートに書かせた。 ○考えの根拠を明確にしたり，新たな視点を気付かせたりするために，仲間と話合いをする。 ○話合いを通して，補足や発見があった生徒には加筆させた。
(3)　課題について交流する。(全体)	○自分の考えを発表し，話し合おう。	○兼好法師の思いについて読み深めさせるために，仲間の意見に反論したり質問したりしながら，自分の体験を踏まえて発表するよう促した。 ◇兼好法師の考え方について，他の表現や体験と関連付けて自分の考えを持つことができた。（発表・ワークシート）

(4) 生徒の学びの実態

生徒には「ものぐるほし」の意味として古語辞典にある「狂おしい気持ちだ」「ばかげている」「気持ちが高ぶっている」を提示した。その中から，生徒は他の章段と併せて兼好法師の思いを解釈した。

学習者74名の中で

①気持ちが高ぶって，狂おしい気持ちになっている……46名

②ばかげている……28名

という解釈となった。

【①と解釈した生徒の意見】

○たわいのないことでも，書き付けることに集中するとものの核心に迫り，異常なほど気持ちが高ぶってきたのであろう。それが，最終段につながっていくのだと思う。最終段では，仏にどうやったら成れるのか，という兼好法師自身の問いがなされているが，結局明確な答えは父からもらえなかった。核心に迫りつつも，結局答えが見つからない。そこに生きるということの意味を考えたのではないか。

○『徒然草』は直訳すると『ひまつぶしノート』である。序段の意味と題名を照らし合わせてみると，この序段は『徒然草』を書いている兼好法師の状態を表していると思った。一日中何もすることがなくて，ただ一心不乱に書いていると不思議に気持ちが高ぶり，狂おしい気持ちになったのだと思う。その狂おしい気持ちが，他の章段の人間の愚かさにつながったり，ふと我に返って，他の人とのつながりを説いたりしていることにつながっていったのではないかと思う。

○そこはかとなく書き付けることで，自分自身の考えや思いを知って，自分がどのような人間かを知り，自分自身を発見して驚き，気持ちが高ぶったのだと思います。また，そこに「あやしうこそ」があることから，自分の人間性をもっと深く知りたいという意欲が湧いてきたのではないかと思います。そのため，他の段の書き方が「事実＋自分の感想，考え」になっているのだと思います。

以上のように，「書く」という行為に熱中し，「書く」ことは自分自身を表すことであり，そこに兼好法師自身の新たな発見があったのではないか，という意見を多くの生徒が書いていた。「書く」ことと兼好法師自身の「生き方」をセットにして考えている生徒が多かった。

また，この「気持ちが高ぶっていて，狂おしい気持ちになる」と解釈した生徒の中には，３名ではあるが「無常観」とつなげている生徒もいた。生徒は，『徒然草』を学習する前に『平家物語』を学習しており，冒頭部分の有名な場面に加えて「敦盛の最期」の場面で武士としての生き方について考えている。そこで，同じ鎌倉時代に書かれている『徒然草』にも無常観が漂っていると感じたのではないかと考えられる。以下の文章は，「無常観」について書いた生徒のものである。

○兼好法師は『徒然草』を通して「無常さ」を伝えようとしていると思います。序段の中で筆者の思いが一番表れている部分は「あやしうこそものぐるほしけれ」というところで，これは「狂おしい気持ち」「気持ちの高ぶり」などの意味がありますが，では，なぜそのような思いになったのでしょうか。他の段には愚かな話や失敗談がありますが，普通でないことを哀れむ，それが人間の日常です。僕は，兼好法師が他の章段に書いているように，世の中や自分を見つめ直したとき，「哀れ」や「儚い」という気持ちになったのだと思います。なんとなく心にうかんだこと，それは今の世の中のことだったり，自分の本来の姿だったりすると思います。そこにあるのは，すべて「無常」のものばかりである，ということに思い至ったのではないかと思います。

○「猫又」の話や「因幡国に，何の入道とかやいふ者の娘」などの話。いずれにせよ，兼好法師にとってはどうでもいい話だ。しかし，兼好法師が序段で「不思議と気持ちが高ぶってくる」と書いているように，読んでみるとなかなか面白いものだ。兼好法師が伝えたかったのは，「無常観」，つまり，世の中は常に変わり，はかないものであるということだったのではないか。その「無常」の世の中で起こるとりとめのないことが，実は深く考えさせられることであったり，人間くさかったりするということだと思う。「無常」だからこそ面白い，と考えたのではないだろうか。

『徒然草』の内容に加え，『徒然草』が鎌倉時代のものであること，兼好法師が「法師」であることから「無常観」に結び付くのではないかと考えたと思われる。今回の学習の中で，「筆者は『法師』だから，仏教の修行をした人。熊谷次郎直実と同じような考えを持って仏道に入ったのではないか。」と発言した生徒がいた。『平家物語』の「敦盛の最期」の場面で，熊谷次郎直実が敦盛を討ち，その後，出家したことを学習している生徒は，法師という職業は「自分の身や世をはかなんでなるもの」というイメージになり，そのため「無常観」に結び付いたのではないかと思われる。本文の内容や時代，既習事項から「無常観」に結び付いたところは良かったと思うが，「法師」の説明について一面的な見方になった部分は教師の説明不足と反省する。

【②と解釈した生徒の意見】

○兼好法師は「なぜこのようなことを自分はしているのか」と不思議に思い，ばかげていると感じたのだと思います。硯に向かって過ごした一日が，果たして自分にどのような意味があったのか，その意味を知るために，他の段をまとめたのだと思いました。
○書き付けているものを改めて読み返してみると「不思議と世の中はばかげたことばかりだ」ということを言いたかったのではないかと思う。次の段から続くたわいもない話の序章として書き，実は深い話もあるのだが，世の中にはたわいもないことが多いということを示したかったのではないかと思います。
○どうでもいいようなたわいもないことを考えていると，それはばかげた話に結び付き，なぜ私はそのように考えたのだろうと自分でもわからなくなって，不思議である，と兼好法師は言っているのではないかと思う。
○昔のことを思い出してももう過去には戻れないのに，どうしても過去のことことばかりを思い浮かべてしまう自分をばからしく思っているのだと思う。この後に続く話は，兼好法師が経験したこと，見聞きしたことと，過去のことばかりである。だから，そのようなことばかりを書く自分を客観的に見ているのだと思う。

②の解釈をした生徒は，兼好法師が序段の自分自身，滑稽話や失敗談を取り上げ，それを書いている自分自身を客観視していると捉えている生徒が多かった。「自分はなぜ書いているのか。」「自分はなぜこのような話を書いたのか。」と自問自答し，その答えが見つからないままに書き続けている我が身を嘆いたり，不思議に思ったりしていると考えたようだ。

4　成果と課題

(1)　協同の学び合いの場の充実

文章と向き合う時間，自分の考えをワークシートにまとめる時間を十分に設け，課題について個人で考える時間を確保することで，自分の意見を持って学び合いに参加することができていた。また，ワークシートにまとめる前に，仲間との意見交流の時間を設け，課題に取り組みづらい生徒の手助けとした。３年間を通して，課題に対して学級全体で話し合いながら解決するという学

習形態を継続したきたことについて，生徒は「新しい意見や視点を知り，それを繰り返すことで，様々な視点でものごとを捉えることができるようになった」「課題についてみんなで考える中で，さらに新たな課題を見つけることができ，全員で深く読めた」「同じ言葉でも違った見方や捉え方があることを知ることができて楽しかった」などの感想を挙げた。また，共感できない作者の表現や仲間の意見に対しても，「なぜそのような表現になるのか」「その意見の意図は何か」を考えるなど，ただ批判するだけで終わるのではなく，その意図を考えることを楽しみながら文学的作品を協同的に読み深めるということができたのではないかと思う。ただ，話合いが白熱すると一つの課題にかなりの時間を費やすことになったり，個人で考える時間が不足したまま話合いをしてしまうと発言する生徒が限られたり，深まりがなかったりと，課題も残る。

(2) 音読と視写を取り入れた授業の工夫

『平家物語』『徒然草』などの古典や，『挨拶―原爆の写真によせて』『レモン哀歌』などの詩の授業で音読と視写を多く取り入れた。視写し，繰り返し音読することは，一語一語書き綴っていった作者の体験を生徒は追体験することになり，より言葉そのものに目を向けるようになったと感じる。特に今年度９月に学習した『挨拶―原爆の写真によせて』では，話合いの中で，詩の中のすべての言葉が生徒の発言に挙げられ，一語一語がその作品全体を作っていることを体感していたようである。また，視写と音読を繰り返してきたことで，積極的に辞書を引くようになってきた。意味がわからない言葉はもちろんであるが，既存の知識以外の言葉の意味があるのではないか，と考えて辞書を活用している生徒が多い。それは読みの学習だけではなく，文章を書くときにも見られ，正確な言葉の意味に自分の考えを加えて表現する生徒が多くなったことも成果として挙げられる。

(3) 学習者個々による学習課題の設定

この取組について生徒が「自分で課題となる言葉を設定するためには，何度も何度も文章を読む必要があるので，それをするだけでも文章を理解することにつながると思った。」という感想を書いている。正直なところ，私自身そういった効果を考えていたわけではないが，考えてみれば，生徒の言葉通り，課題となる言葉を考える第一段階，その課題について学級全体で話し合う第二段階，全体で出た意見を自分なりにまとめていく第三段階と，課題を設定してその答えを自分で表現するまでに何度も文章や言葉を見直すことになる。そのことが読みを深める一助となったことは確かである。他には「自分が気になったところを中心に学習を進めていけるので楽しかった」というものもあった。自分の課題に対し，仲間が多くの意見を出してくれ，解決に近づいていく楽しさ，自分の課題が仲間の課題と結び付いていき，文章全体の理解につながる楽しさを感じることができたようである。ただ，この取組では多種多様な課題が出されるため，生徒達の課題をどうつなげていくか，どう取り上げていくかという点で課題が残る。生徒が設定した課題に対し，個々が達成感を感じられるような授業にするための方法をこれからも研究していきたい。

研究（その2）

仲間との関わり合いの中で考えを深め，古典に親しむ学習指導の工夫

（実践者）大上　航太

1　研究テーマ設定の理由

昨年度までの二年間，古典作品を扱った学習におけるパフォーマンス課題や，小集団で力を合わせ，お互いの良さを認め合いながら課題を協同的に解決する場を効果的に設定するとともに，主張と事実，理由づけ（説明）を明確にしながら筋道を立てて考えたり表現したりする意識を持たせることで，次のような成果が得られた。

○　主張，事実，理由づけを意識し，筋道を立てて考えさせる機会を意識して設けてきたことで，論理的に思考し表現する力を高めるとともに，その力を発揮させて一人一人の考えを論理的かつ着実に深めることができた。

○　パフォーマンス課題を，教材や生徒の実生活に合ったものにすることで生徒の課題意識を継続して持たせるとともに，相手意識を持って文章を考える態度につながった。

○　小集団で力を合わせお互いの良さを認め合いながら課題を協同的に解決する場を設定したことで，相手を認める意識を持ったり，あるいは相手に認めてもらい自己肯定感を持ったりしながら課題解決に取り組ませることができた。

以上のことが，一人一人の考えを深めるとともに，古典の魅力を味わわせ親しませることにつながった。

今年度は，これまでの成果を継承し，小集団で力を合わせ，お互いの良さを認め合いながら課題を解決する協同の場の効果的な設定と，筋道を立てて考えたり表現したりする論理的思考を課題の解決のために生徒に発揮させることを特に意識して授業実践を行っていくことを目指し，本研究テーマを設定した。

2　研究の内容及び方法

(1)　論理的に思考し表現する学び合いの工夫

文章を読み取り自分の考えを主張する際に，主張の根拠となる事実（本文中の表現）を捉えさせ，そこから自分の主張につなぐ説明を行うよう意識させる。また，ワークシートを作成する際に，本文中の表現を基に説明を加えながら自分の考えを記述することができるように工夫する。

(2)　パフォーマンス課題の工夫

最初から教師が与えた課題に取り組むのではなく，生徒自身が文章を読んで感じた疑問を課題につなげることで，単元を通じて主体的に活動に取り組ませる。

(3)　協同の学び合いの中で考えを深める学習指導の工夫

古人のものの見方について，生徒同士の多様な意見を積極的に交わし合い，お互いの良さを認め合いながら自分の考えを深めるために，お互いの考えを確かめ合ったり，主張と事実，理由づけ（説明）のつじつまが合っているか指摘し合ったりする活動を適切に取り入れる。

3　研究の実際

(1)　**単元名**　清少納言のものの見方についての解説文を書こう（2年）

(2)　**「逆向き設計テンプレート」による単元計画**

第1段階：求められている結果

【研究テーマを踏まえた単元目標】
清少納言のものの見方について解説する文章を『枕草子』の表現を引用しながら書くことで，清少納言のものの見方に触れ，『枕草子』の世界に親しむ。

【本質的な問い】
古典作品を味わうために，作者のものの見方や考え方を自分なりに捉えるためにはどうすれば良いか。

【永続的な理解】
古典から作者のものの見方につながる記述を選び出し，その記述と自分の経験や価値観などを基に作者のものの見方を想像することで，作者のものの見方に触れ，その価値に気付くことが大切である。

【生徒は次のことができるようになる】（知識や技能）
○『枕草子』における清少納言のものの見方や考え方，特に清少納言が好感を持つ判断基準について理解することができる。
○文章から必要な情報を取り出し，それを基に考えを深めることができる。

【単元目標に必要な「論理的に思考する力」】
主張，事実，理由づけを明確にし，筋道を立てて文章を書く。

第2段階：評価のための証拠

【パフォーマンス課題】
清少納言が趣を感じる対象に挙げられた「からす」，かわいらしいと感じる対象に挙げられた「ちご」は「憎きもの」でもその対象として挙げられています。「憎きもの」を比較対象にして，清少納言が好感を持つ判断基準について解説する文章を書きましょう。その際，もしあなたが平安時代にタイムスリップしたら，清少納言に好感を持ってもらえるもの，好感を持ってもらえないものを具体的に挙げて説明しましょう。

【パフォーマンス課題における評価基準】	**【他の根拠】**
○清少納言が好感を持つ判断基準の説明は筋道が通っているか。 ○清少納言が好感を持つもの，持たないもの，として挙げた例は適切か。	○小集団活動の観察 ○ワークシートの記述分析 ○アンケートにおける評価・記述

第3段階：学習計画（全6時間）

1	○『枕草子』の「冒頭の文章」を読み，清少納言がどんなものに趣を感じているか考える。 ○「うつくしきもの」を読み，清少納言がどんなものにかわいらしさを感じているか考える。 ○「憎きもの」を読み，「からす」「ちご」が嫌なもの，腹が立つこととしても挙げられているところから，清少納言が好感を持つ判断基準について考えるという課題を持つ。	2時間
2	○清少納言が好感を持てるものの比較対象として「憎きもの」を読み，その判断基準について考える。 ○清少納言が好感を持つ判断基準について，お互いの考えを交流する。 ○話し合ったことを基に，清少納言が好感を持つ判断基準について解説する文章を書く。	3時間
3	○お互いが書いた文章を相互評価するとともに，自分のものの見方と比べて考えたことを発表する。	1時間

(3) 指導の実際（4／6時間）

①主　題　清少納言が好感を持つ判断基準についてお互いの考えを深めよう。

②ねらい

○　清少納言が好感を持つ判断基準について，進んで意見を述べたり助言をしたりすることができる。

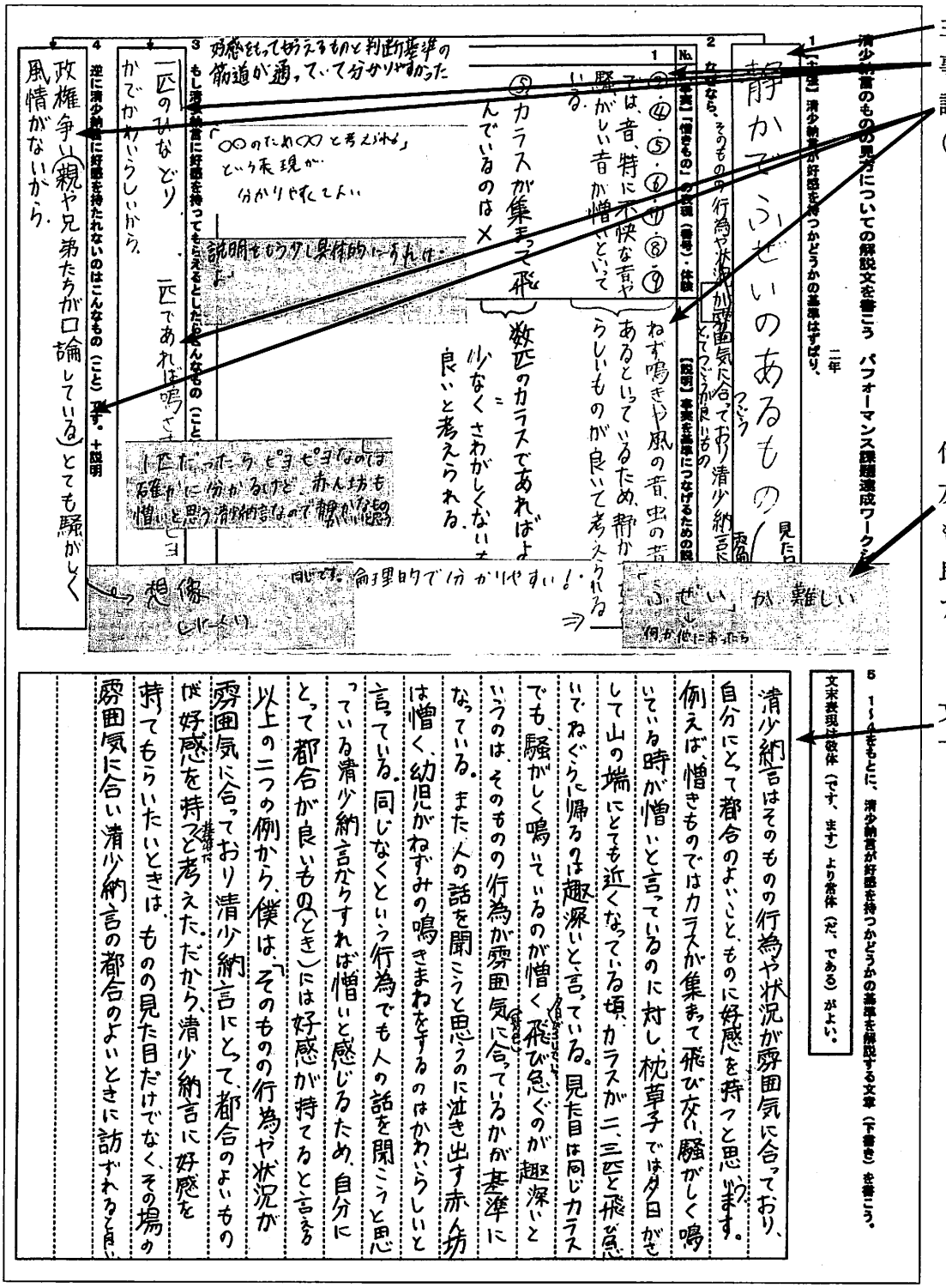
○　相手の助言などを通して，清少納言が好感を持つ判断基準について自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

③展　開

学習活動（形態）	時間	○教師の働きかけ　•生徒の反応	○指導の工夫　◇評価（方法）
1　本時の学習課題を確認する。 （一斉）	5	○清少納言が好感を持つ判断基準がよく分かる文章にするために，お互いの意見について交流しよう。	○小集団で積極的に話合いが行えるように学習課題を明示した。
2　お互いの考えについて交流する。 （小集団） ↓ （全体）	30	清少納言が好感を持つ判断基準についてみんなで交流しよう。 • 清少納言が好感を持つ判断基準を裏付けるための事実（文中の記述）がぴったりで良い。 • 清少納言は落ち着いた状況や小さなものに好感を持っているのではないか。 • 清少納言は場にふさわしい，きちんとした状況に好感を持つのだな。それは，自分の感覚と似ているな。	○自分の考えをよりよいものにするために小集団で交流させた。その際，付箋紙を活用させた。 ○論理的に思考し表現する力が発揮されるよう，自分の意見を述べる際には具体的な表現を挙げながら発言するよう促した。 ◇清少納言が好感を持つ判断基準について，ワークシートを基に積極的に発言を行っている。 （観察・ワークシートの記述分析）
3　交流したことを基に清少納言が好感を持つ判断基準について，自分の考えをまとめ直す。 （個人）	10	○自分の考えをまとめよう。 • 清少納言が好感を持てるのは控えめな状況のときだということを書こう。 • 清少納言は自分のスタイルを持っていてそれが邪魔されることは特に嫌みたいだ。	◇相手の助言を基に自分の考えを見直し，枕草子から読み取れる清少納言のものの見方について考えを広げている。 （観察・ワークシートの記述分析）
4　本時のまとめと次時の活動内容の確認を行う。 （個人） ↓ （一斉）	5	○交流した成果を振り返ろう。 • 友人のアドバイスのおかげで，清少納言が好感を持つ判断基準がより伝わる解説文になりそうだ。 ○今日の活動を基に次の時間に解説文を完成させよう。 • 次の時間は自信を持って文章を書くことができそうだ。	○本時の振り返りをワークシートに記述させることで，交流を行ったことによる成果を確認させた。
授業研究の視点	○清少納言が好感を持つ判断基準を，事実（文中の記述や自分が考えた具体例）・理由づけ（解釈，説明）を意識しながら表現させたことは，作者のものの見方について自分の考えを持たせるのに効果的だったか。 ○付箋紙を使いながら話合いを行わせたことは，自分の考えを広げたり深めたりすることや，お互いの良さを発見させ自己の肯定感を高めることにつながったか。		

(4) 生徒の学びの実際

パフォーマンス課題の解決に向けて第３・４時で生徒が使用したワークシート（**資料１**），パフォーマンス課題に対する生徒の解説文をルーブリックと照らし合わせた結果（２年生１クラス39人対象）（**資料２**），第４・６時の振り返りで生徒が記述した内容の主なもの（**資料３**）は次の通りであった。



資料１　第３・４時で生徒が使用したワークシート

清少納言が好感を持つ判断基準の説明は筋道が通っているか。		
A	【主張（清少納言が好感を持つ判断基準）】，【事実（「憎きもの」の表現や体験など）】，【説明】の筋道が通っている。さらに，説明が分かりやすく納得いくものである。	37人（95%）
B	【主張】，【事実】，【説明】の筋道が通っている。	2人（5%）
C	【主張】，【事実】，【説明】の筋道が通っていない。	0人
清少納言が好感を持つもの，持たないもの，として挙げた例は適切か。		
A	清少納言が好感を持つもの，持たないもの，として挙げた例が，両方とも主張（好感を持つ判断基準）に合っている。さらに，例が，読み手に分かりやすい。	33人（85%）
B	清少納言が好感を持つもの，持たないもの，として挙げた例のどちらかは，あるいは両方が主張に合っている。	6人（15%）
C	清少納言が好感を持つもの，持たないもの，として挙げた例のどちらも主張に合っていない。	0人

資料2　パフォーマンス課題に対する生徒の解説文をルーブリックと照らし合わせた結果

第4時の振り返り

【主張（好感を持つ判断基準），事実（古文の表現，体験），理由づけ（説明）を意識して文章を読んだり書いたりできたか。】

よくできた　7人　　できた　23人　　あまりできなかった　5人　　全くできなかった　1人

【主張・事実・説明を意識して話し合うことができたか。】

よくできた　12人　　できた　21人　　あまりできなかった　2人　　全くできなかった　1人

【友達と交流して良かったことや学んだこと。（自由記述）】

○自分だけの主観だけではなく，友達の客観的な意見を聞くことができてとても参考になった。

○体験を入れるなどのアドバイスを受けたり，友達の書き方を見たりして，自分では思いつかない手法を取り入れるのもいいかもしれないと思った。

○自分が気付くことができなかった，主張と具体例の矛盾や良い点が分かり，他の人との意見交換は大事だと思った。班で話し合って良くなった意見が，全体で話し合ってさらに良くなることがすごく面白かった。

○自分の判断基準が少しずれていることに気づくことができたのでもう一度読み直して訂正しようと思う。説明が事実に基づくようにするなど，判断基準を考え直す良い機会になった。

○「うつくしきもの」からも説明することや清少納言が好感を持つものの例のアドバイスをしてもらえて，どう直せば良いかがはっきりした。

○自分が良いと思っていたところでも周りから見ると少し足りないと思われるところがあって改善することができた。

○他の人の意見により，自分の説明が十分でなかったことを反省した。清少納言の判断基準は一言で言えるものではなく，いろいろなものが重なっていると分かった。

○始めは清少納言の判断基準を近いか遠いかの距離だけで判断していたので，音や動きでも判断するという考えを知れて良かった。

○自分の判断基準は少し具体的すぎて当てはまらないものもあったけれど他の人の意見を聞いて合体させてみると抽象的でよりよいものになったと思う。

第６時の振り返り
【枕草子の学習全体を振り返って，学んだことや身につけたこと。(自由記述)】
○清少納言の好みを文章から想像できることに驚いた。また，一人一人見方や考え方が違っていてとても面白かった。
○同じものでも状況によって好きか嫌いかが変わっていたので面白いと思った。
○文章中の事柄や物を比較することによってそれぞれの良さや短所に気付き，清少納言の人柄や考えをまとめることができた。
○清少納言が見るもの，聴く音，感じたことを想像してどんな気持ちだったのか考えるととても楽しかった。
○清少納言は自分（現代）と同じ考えのものもあるし，異なった考えもあって面白かった。また，友達の基準も様々で，読んでいて楽しかった。もっと枕草子を深く読みたい。
○一人一人違う主張があり，自分と同じ事実を使っていても説明の仕方によってうまく主張につなげている人がいてすごいなと思った。

資料３　第４・６時の振り返りで生徒が記述した内容の主なもの

４　成果と課題

(1)　論理的に思考し表現する学び合いの工夫

『枕草子』の「冒頭の文章」「うつくしきもの」「憎きもの」に出てくる表現を事実として捉えさせ，そこから清少納言が好感を持つ判断基準（主張）につなぐための説明（理由づけ）を教師が意識して求めたり，ワークシートを『枕草子』の表現を基に説明を加えながら自分の考えを記述することができるものにしたりすることにより，生徒は主張，事実，理由づけを意識し，筋道を立てて考えたり表現したりすることができるようになった。また，清少納言が好感を持つ，持たない具体例を文章の記述からではなく生徒自身に考えさせることで，主張と事実の結びつきや整合性を考えさせることにつながった。

(2)　パフォーマンス課題の工夫

パフォーマンス課題を，単元の最初に教師から提示する形ではなく，『枕草子』の「冒頭の文章」「うつくしきもの」を読んだ後，そこに登場する「からす」「ちご」が「憎きもの」にも登場するところに着目させ，清少納言が好感を抱く，抱かないには判断基準があるのではないかという考えにつなげることで，生徒が主体的に取り組める課題となった。また，基準を考える際にも，清少納言が好感を持つ，持たないの両方に登場する「からす」「ちご」を例に挙げたことで，取り合わせやその場にふさわしい状況に対して好感を持ちやすい清少納言のものの見方を捉えさせることにつながった。ただ，パフォーマンス課題の内容は「好感を持つ基準は何か」ではなく，単純に「どのようなものに好感を持つか，持たないか」という課題にしたほうが考えやすかったのではないかと考えた。また，ルーブリックについては，書きぶりについての良しあしを評価するにとどまり，清少納言のものの見方を深めることに十分機能しない部分があった。また，具体的に「○○という言葉が使われている」「○○ができている」「○○に気がついていない」といった具体的な文言を設定することができれば，より具体的にアドバイスや修正が行えた可能性があった。

(3)　協同の学び合いの中で考えを深める学習指導の工夫

清少納言のものの見方について，付箋紙等を使ってお互いの考えを確かめ合ったり，主張と事実，理由づけ（説明）のつじつまが合っているか指摘し合ったりする活動を取り入れたことで，自分の主張の説明不足や矛盾，多様な考えに気付き，自分の考えを深めることができた**（資料３より）**。また，交流の後自信を持って表現活動に臨み，筋道の通った読み手に分かりやすい主張を展開することで，具体から抽象を導き出したり，多面的な見方を身に付けたりすることにつながった**（資料２・３より）**。ただし，付箋紙を使って交流する活動は想定以上に時間を要したので，指示の出し方や使う場面については再考する必要がある。

研究（その３）

他者との対話的な学びを通して
文学作品を読み深める学習活動の工夫

（実践者）丸山　佑樹

１　研究テーマ設定の理由

多様でありかつ変化が激しいこれからの社会を生きる生徒たちは，将来誰も推測しなかった状況に陥ることがあると考えられる。その中で，持続可能な社会を創造するためには，単に知識や技能を身に付けることだけに留まらず，既知のことを活用して新たなものを生み出したり，他者の力を借りて知恵を結集させたりして，自分たちで現状を打破していく力が求められる。持続可能な社会は多様な主体が状況や相互関係に応じて互いに連携・協力することにより構築されるものである。

これまでの研究で，文学作品を読み深めるための話合い活動を中心とした対話的な学びが，他者と自分の読取を対照し，自分の考えを広げたり深めたりするのに有効であることが分かった。さらに，意見交流のために必要な論理的な思考力・表現力を身に付ける道筋も明らかになった。今年度は，引き続き対話的な学びを充実させ，学習者が他者と協同して学びに向かおうとする主体的に学ぶ力を高めたい。

文学作品を読み深めるための対話的な学びを中心に授業を構成することによって，他者と協同して課題を解決していく力を育成することができると考え，本研究テーマを設定した。

２　研究の内容及び方法

(1)　生徒の主体的な思考・判断が生かされる単元を貫く課題の設定

生徒にとって必要感のある課題や興味や関心を持ったことを基に，単元を通して解決していく課題を設定することで，主体的な学びを引き出し，本単元で付けたい国語の能力を生徒に身に付けさせたい。

(2)　論理的に思考し表現する力を生かした対話的な学習活動による学び合いの充実

ペアや小集団，全体などの学習形態を工夫したり，問答ゲームやジグソー法，思考ツールなどを使ったりして，個々の読みをさらに深めるための対話的な学びの場を充実させる。また，教師はファシリテーターの役割を担い，生徒同士の対話によって思考を深めさせる。

(3)　生徒の活動の様子やワークシート，授業アンケート等の分析

授業における生徒の様子を観察したり，授業で使用したワークシートや授業アンケートを分析したりして，今後の指導・研究に役立てる。

３　研究の実際

(1)　**単元名**　自分の考えを言葉で伝え合おう　―「句会をひらく」―

(2)　**「逆向き設計テンプレート」による単元計画**

第１段階：求められている結果
【研究テーマを踏まえた単元目標】 他者との対話によって俳句の読みをさらに深め，自分のものの見方や考え方をより豊かなものにすることができる。
【本質的な問い】 俳句の読みにおいて，自分のものの見方や考え方を豊かにするにはどうすれば良いのか。

【永続的な理解】

俳句は，世界に誇る日本の言語文化の一つである。また，有季定型を原則に，洗練された言葉や表現を用いた言語芸術であるといえる。俳句を読むことで，様々な表現の方法を学んだり，効果的な表現の仕方について評価したりすることで，語感を磨き，語彙を豊かにすることができる。また，洗練された言葉や巧みな表現から詠み手のものの見方や考え方を読み取り，他者との対話を通して互いの読みを交流することで多様な考えに触れさせ，自分のものの見方や考え方を豊かにすることができる。

【生徒は次のことができるようになる】（知識や技術）

○俳句に用いられている言葉や表現を批判的に読みながら，ものの見方や考え方について考えることができる。

○俳句を読み深める話合い活動を通して，自分の考えが他者に分かりやすく伝わるように表現することができる。

【単元目標に必要な「論理的に思考し表現する力」】

自分が気に入った俳句の良さを，俳句に用いられている言葉から読み取ったことを根拠にして読み深めることができる。

第２段階：評価のための証拠

【パフォーマンス課題】

各自が創作した俳句を使って句会をします。各班から選ばれた俳句の中から優勝俳句を決めていく句会です。これまでの学習で学んだことを生かして，自分が選んだ俳句の良いところを見付け，その俳句の良さが友達に伝わるように分かりやすく発表しましょう。

【パフォーマンス課題における評価基準】	**【他の根拠】（評価方法等）**
○言葉を基に俳句の内容を解釈することができる。 ○言葉の意味や用い方，俳句表現の工夫から，その効果を考えることができる。	○話合い活動の発表の様子 ○ワークシートによる記述 ○自己評価表

第３段階：学習計画（全９時間）

1	俳句を詠もう。（創作）	３時間
2	俳句を読もう。（鑑賞）	２時間
3	句会をひらこう。（句会）	４時間

⑶　指導の実際（８/９時間）

①主　題　句会を通して自分の読取を深めよう。

②ねらい

俳句に用いられている言葉や表現から情景や詠み手の思いやものの見方を読み取り，対照することで，自分のものの見方を豊かにすることができる。

③展　開

パフォーマンス課題，本時の学習課題を確認し，句会に残った俳句を声に出して読んだ後，以下の流れで授業を行った。

学習活動（形態）	○教師の働きかけ	○指導の工夫　◇評価（方法）
3　気に入った俳句を選び，その俳句の良さを考える。（個人）→（ペア）	**自分が気に入った俳句を優勝俳句にすることができるだろうか。**	○俳句に用いられている言葉の効果的な使い方や工夫された表現などに注目させるために，俳句を視写させた。
	○俳句から読み取ったことを分かりやすく主張できるように，自分の考えを整理しよう。	○俳句から読み取ったことを，分かりやすく説明するために，問答ゲームで根拠を明確にさせた。

4　話し合って互いの考えを伝え合う。　（全体）	○それぞれの俳句の良さが伝わり，周りが共感するような説明をしよう。	○発表した内容について，付足・反論・質問などをさせることで，多様な考えを引き出し，各自の考えが深まったり，広がったりする対話的な学びを充実させた。 ◇言葉や表現から読み取ったことを根拠に，俳句の良さを伝え合い，自分の考えを広げたり，深めたりすることができる。（観察・ワークシート）

(4)　生徒の学びの実際

パフォーマンス課題で用いたルーブリックによる評価の結果（３年生１クラス37名対象），生徒の感想は以下の通りである。

〈ルーブリックによる評価の結果〉

A	明確な根拠を基に俳句の内容を解釈している。言葉の意味や用い方，俳句表現の工夫から，その効果を読み取っている。話合いから新たな発想を得たり，考えを深めたりして，自分の読みも発信して読み深めている。	32人
B	俳句の内容を想像し，自分なりの解釈をしている。言葉の意味や印象を基に，俳句の良さを読み取っている。話合いを受けて，自分の考えを広げたり，深めたりして読み深めている。	５人
C	俳句の内容を解釈することができていない。根拠は明確ではないが，自分なりに俳句の良さを読み取っている。話合いを生かすことなく，自分の考えだけに固執している。	０人

〈生徒の感想〉

○言葉を深く読み取ることができるようになりました。特に，句会ではみんなで話し合うことで，その句をさらに読み深めることができておもしろかったです。また，自分の考えも伝えることができるようになったと思います。
○俳句は作り手も読み手も国語力が必要だと思いました。自分では理解しきれなかった俳句も，句会によって理解できたり，新たな発想も生まれたりして，とても楽しかったです。
○授業を受けて，身近な植物や季節に関することがあれば，良い句ができないかと考えるようになりました。
○俳句は一つ一つの言葉を大切にしていて，十七音に込められたたくさんの思いが伝わってきました。自分の根拠が明確ではないところも，句会を通して級友が言葉にしてくれて，納得することができました。
○なんとなく良いと感じる要素を明確にするとき，今までとは違う視点から見てみると，新たな考えが浮かびやすくなります。

４　成果と課題

(1)　生徒の主体的な思考・判断が生かされる単元を貫く課題の設定

俳句の創作→鑑賞→句会の順に学習することで，生徒の関心意欲に沿った学習が行え，主体的な学びの姿勢を身に付けさせることができた。俳句の創作から取り組ませることで，「俳句とはどのようなものか」「創作するために必要な基礎知識は何か」「どのように創作すればよいか」という課題意識を持って，季語や切れ字といった基礎事項や取り合わせの手法を学ばせることができた。さらに，句会に向けてよりよい俳句を創るために秀句を参考にしたいという意欲を持って鑑賞活動を行い，創った俳句を評価してほしい，級友の俳句を読みたいという意欲を持って句会に臨ませることができた。生徒の，「～するにはどうすればよいか」という課題意識や「～したい」という学習意欲を大切にした単元構想をすることで，主体的な学びの姿勢を身に付けさせることができた。

(2) 論理的に思考し表現する力を生かした対話的な学習活動による学び合いの充実

ペアや小集団，全体などの学習形態を工夫したり，問答ゲームやジグソー法，思考ツールなどを使ったりしながら俳句の読取を行うことで，論理的に思考し表現する力を高めることにつながった。さらに，句会で他者の読取を知ることによって新たな視点で読み取ることができたり，反論や質問したりされたりする中で自分の考えが深まったして，俳句の読みを深めさせることができた。ただ，句会のテーマは「自分が良いと感じたことを主張する」であったが，生徒同士の発言によって刻々と話合いが進み，深まっていく展開の中で，根拠を用いて論理的に主張することが困難であった生徒もいた。

(3) 生徒の活動の様子やワークシート，授業アンケート等の分析

授業で使用したワークシートや授業後の振り返りシートの記述などから，授業展開を変更したり，生徒の課題意識に沿った学習課題を設定したりした。それによって，学習内容が生徒にとって必要感のあるものにすることができ，主体的・協同的な学びを引き出すことができた。ワークシートやアンケートで生徒の学びの様子を分析したことを生かすことで，一単元を通じて意欲的に取り組ませることができたものの，「なぜ俳句を読むのか」「なぜ文学作品を読むのか」といった本質的な問いに生徒自体が気付いたり，それについて自分なりの考えを持たせるまでには至らなかった。生徒が目的意識を持って学習に臨められる手立てについては課題が残った。

第3章　おわりに

文学作品における読みの課題を協同的に追究し読み深める学習活動を展開することにより，自立と共生の力を育てることができると考え，３年間実践を行ってきた。

協同の学び合いを充実させるために，単元を通して課題意識を持続させる生徒の生活や考えに根ざしたパフォーマンス課題の設定をした。また，日常から主張・事実・理由づけを意識して考えさせたり記述したりするとともに，自分の考えの変化や他者との関わりについて振り返ることができるワークシート等の工夫，付箋紙等の活用などを行ってきた。

その結果，課題に主体的に取り組み，主張・事実・理由づけを明確にしながら考え，表現するとともに，生徒同士の多様な意見を積極的に交わし合い，お互いの良さを認め合いながら課題を解決する生徒の姿につながった。そのことが，自分の経験・価値観・感性などを基に言葉を用いて課題を解決する力（自立の力）と，多様な価値観を認め，お互いの個性を尊重したり他者と協調しながら進んで行動したりする力（共生の力）につながった。

参考文献

三浦和尚（1993）「中学校国語科学習指導の展開―表現活動を中心として―」三省堂
中西信行（2002）「確かな読みを拓く課題解決学習の新視点」明治図書
三浦和尚（2011）「俳句の授業ができる本　創作指導ハンドブック」三省堂
奈須正裕・江間史明（2015）「教科の本質から迫るコンピテンシー・ベイスの授業づくり」図書文化社
西岡加名恵（2016）「『資質・能力』を育てるパフォーマンス評価　アクティブ・ラーニングをどう充実させるか」明治図書
錦織圭之介(2016)「単元を貫く学習課題と言語活動―課題を解決する過程を重視した授業づくり」東洋館
三浦和尚（2016）「国語教育実践の基底」三省堂
井上泰至（2017）「俳句のルール」笠間書店
三浦和尚（2017）「高校国語科授業実践的提案」三省堂